

作成日:2017 年 12 月 4 日

製品安全性データシート(SDS)

1. 化学物質等及び会社情報

1.1. 化学物質等の名称

製品名: SLIDE® Mold Shield
SLIDE® モールドシールド
品番: 42910

1.2. 適切な用途及び推奨用途

推奨用途 工業用金型防錆剤

1.3. 輸入者及びSDS提供元

会社名: 株式会社TASKMATE(タスクメイト)
担当部門: 営業部
住所: 〒607-8465 京都市山科区上花山坂尻19-36
電話番号: 075-595-4358(代表)
Fax 番号: 050-3153-3487
Eメール: info@taskmate.jp

2. 危険有害性の要約

2.1. 物質または混合物の区分

規制(EC) No 1272/2008

67/548/EEC 区分: セクション 16 の R フレーズ全文参照

Rコード: R16 全文

GHS 分類結果**物理化学的危険性**

可燃性・引火性ガス	区分1
高压ガス	液化ガス・低压液化ガス
引火性液体	区分1

健康に対する有害性

特定標的全身毒性(単回暴露)	区分3(麻酔作用・気道刺激性)
特定標的全身毒性(反復暴露)	区分1(神経系)
吸引性呼吸器有害性	区分1
急性毒性	区分4
皮膚腐食性・刺激性	区分2

皮膚感作性	区分 1
眼に対する重篤な損傷・眼刺激性	区分 2
生殖毒性	区分 2

環境に対する有害性

水生環境慢性有害性	区分 2
水生環境急性有害性	区分 2

2.2. ラベル要素

絵表示又はシンボル



注意喚起語：危険

危険有害性情報：

極めて可燃性・引火性の高いガス
加圧ガス：熱すると爆発のおそれ
眠気またはめまいのおそれ
飲み込んで気道に侵入すると生命に危険のおそれ
皮膚刺激
強い眼刺激
水生生物に毒性
生殖能または胎児への悪影響のおそれの疑い
呼吸への刺激のおそれ
長期にわたる、または、反復暴露により神経系の障害

注意書き：

[安全対策]

取り扱い後はよく手を洗うこと。
この製品を使用する時に、飲食または喫煙をしないこと。
適切な保護手袋/保護衣/保護眼鏡/保護面を着用すること。
汚染された作業衣は作業場から出さないこと。
環境への放出を避けること。
熱、火花、裸火、高温のような着火源から遠ざけること。
防爆型の電気機器、換気装置、照明機器等を使用すること。
静電気に対する予防措置を講ずること。
全ての安全注意を読み理解するまで取り扱わないこと。
屋外または換気の良い場所でのみ使用すること。

[応急措置]

飲み込んだ場合、口をすすぎ気分が悪い時は、医師に連絡すること。
皮膚に付着した場合、多量の水と石鹸で洗うこと。皮膚刺激または発疹が生じた場合は、医師の診断、手当を受けること。

汚染された衣類は脱ぎ、再使用する前に洗濯すること。
 火災の場合には適切な消化方法をとること。
 眼に入った場合、水で数分間注意深く洗うこと。コンタクトレンズを着用
 していて容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。
 眼に入った場合、眼の刺激が続く場合は、医師の診断、手当を受ける
 こと。
 吸入した場合、空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息さ
 せること。気分が悪い時は医師の診断、手当を受けること。
 飲み込んだ場合、吐かせないこと。医師の診断をうけること。
 [保管]
 日光から遮断し、換気の良い涼しい場所で保管すること。
 容器を密閉しておくこと。
 施錠して保管すること。
 [廃棄]
 内容物、容器を都道府県知事の許可を受けた専門の廃棄物処理業者
 に業務委託すること。

3. 組成及び成分情報

化学物質・混合物の区別 混合物

一般名または化学名 SLIDE® モールドシールド

成分情報

化学名または一般名	CAS 番号	官報公示整理番号 (化審法・安衛法)	濃度または 濃度範囲(%)
ヘキサン	110-54-3	(2)-6	55-65
LPG	68476-86-8 (68475-37-6)	(2)-86	30-40
界面活性剤		(3)-1949	1-7

4. 応急措置

暴露経路による応急措置

吸入した場合：	新鮮な空気のある場所へ移動し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。 気分が悪い時は、医師の診断、手当を受けること。
皮膚に付着した場合：	水と石鹸で洗うこと。皮膚刺激または発疹が生じた場合、医師の診断、手当をうけること。衣類は再使用する前に洗うこと。
目に入った場合：	水で最低 15 分間注意深く洗うこと。コンタクトレンズを着用していて容易に外せる場合は外すこと。眼の刺激が持続する場合は、医師の診断、手当を受けること。
飲み込んだ場合：	口をすすぐこと。無理に吐かせない。 直ちに、医師の診断・手当を受けること。

予想される急性症状及び遅発性症状

吸入:	めまい、し眠、感覚鈍麻、頭痛、吐き気、脱力感、意識喪失
皮膚:	皮膚刺激、発赤
眼:	発赤、痛み
経口摂取:	腹痛、めまい、し眠、感覚鈍麻、頭痛、吐き気、脱力感、意識喪失

最も重要な兆候及び症状

含有するヘキサンは、液体を飲み込むと、肺に食い込んで化学性肺炎を起こすことがある。高濃度の場合、意識低下を引き起こすことがある。中枢神経系、とくに末梢神経系に影響を与え、多発性神経障害を生じることがある。

応急措置をする者の保護

データなし

医師に対する特別注意事項

暴露の程度によっては、定期健診が必要である。

5. 火災時の措置

消火剤

乾燥砂類、二酸化炭素、泡消火剤が有効である。

使ってはならない消火剤

棒状放水、水噴霧

特有の危険有害性

加熱により容器が爆発するおそれがある。
空気と爆発性混合気を形成する。
火災によって刺激性、毒性、又は腐食性のガスを発生するおそれがある。
内容物の一部気体は空気より重く、地面あるいは床に沿って移動することがある。遠距離引火の可能性があり、より低い場所にたまり酸素不足を引き起こすことがある。
燃焼ガスには、一酸化炭素等の他、窒素酸化物系のガス等の有毒ガスが含まれるので、消火作業の際には、煙を吸入しないように注意する。
消火後再び発火するおそれがある。

特有の消火方法

容器が熱に晒されているときは、移さない。
危険でなければ火災区域から容器を移動する。
安全に対処できるならば着火源を除去すること。
消火作業は可能な限り風上から行う。
周囲の設備などに散水して冷却する。
消火後も大量の水を用いて容器を十分に冷却する。

消火を行う者の保護

消火作業の際は、適切な保護具（ボンベ付呼吸補助器具等）や耐火服を着用する。

6. 漏出時の措置

人体に対する注意事項、保護具及び緊急時措置

作業者は適切な保護具（『8. 暴露防止措置及び保護措置』の項を参照）を着用し、眼、皮膚への接触や吸入を避ける。
全ての着火源を取り除く。
近傍での喫煙、火花や火炎の禁止。
直ちに、全ての方向に適切な距離を漏洩区域として隔離する。
関係者以外立ち入りを禁止する。
漏洩物に触れたり、その中を歩いたりしない。
風上に留まる。低地から離れる。
密閉された場所に立入る前に換気する。

環境に対する注意事項

環境中への放出を避けること。

回収、中和、封じ込め、および浄化の方法

漏洩物をかき集めて密閉できる空容器に回収し、後で廃棄処理する。
残留物は乾燥土、砂等の不活性材料で吸収し、あるいは覆って密閉できる空容器に回収する。
危険でなければ漏れを止める。

二次災害の防止策

排水溝、下水溝、地下水あるいは閉鎖場所への流入を防ぐ。
すべての発火源を速やかに取り除く（近傍での禁煙、火花や火炎の禁止）

7. 取扱い及び保管上の注意

取扱い

技術的対策:	「8. 暴露防止及び保護措置」に記載の設備対策を行い、保護具を着用する。
局所排気・全体換気:	「8. 暴露防止及び保護措置」に記載の局所排気、全体換気を行う。
安全取扱い注意事項:	取り扱い後は手を洗うこと。 この製品を使用する時に、飲食または喫煙をしないこと。 適切な保護手袋/保護衣/保護眼鏡/保護面を着用すること。 粉塵、ヒューム、スプレーの吸入を避けること。 汚染された作業衣は作業場から出さないこと。 飲み込まないこと。 皮膚との接触を避けること。 熱、火花、裸火、高温のもののような着火源から遠ざけること。 消防法の規制に従う
接触回避:	「10. 安定性及び反応性」を参照。

保管

技術的対策:	高圧ガス法、消防法の規制に従う。
混触禁止物質:	「10. 安定性及び反応性」を参照。
保管条件:	日光から遮断し冷乾所にて保存すること。

熱、火花、裸火、高温のもののような着火源から離して保管すること。
換気の良い場所で保管すること。
施錠して保管すること。
容器包装材料: データなし。

8. 暴露防止及び保護措置

管理濃度・作業環境評価基準

ヘキサン: 40ppm

許容濃度(暴露限界値、生物学的暴露指標)

日本産業衛生学会(2013): 40ppm【ヘキサン】
140 mg/m³(経皮吸収)(2009 年度版)【ヘキサン】
ACGIH(2013): TWA 1000ppm【LPG】
TWA 50ppm【ヘキサン】

設備対策

作業場には全体換気装置、局所排気装置を設置する。
取り扱いの場所の近くに、洗眼および身体洗浄のための設備を設ける。

保護具

呼吸器の保護具: 適切な呼吸器保護具を着用すること。
手の保護具: 適切な保護手袋を着用すること。
眼の保護具: 適切な眼の保護具を着用すること。
皮膚及び身体の保護具: 適切な顔面用の保護具を着用すること。

衛生対策

この製品を使用する時に、飲食または喫煙をしないこと。
取り扱い後はよく手を洗うこと。
汚染された作業衣は作業場から出さないこと。

9. 物理的及び化学的性質

外観: エアゾール、黄褐色
臭い: 微臭
融点・凝固点: -40℃以下
蒸気密度: 空気より重い
相対密度: 0.644 (水=1)
引火性: 引火性エアゾール
気化速度: データなし
蒸気圧: 137mmHg @21℃
爆発範囲: データなし

溶解性： データなし

10. 安定性及び反応性

10.1. 反応性

通常の取り扱い条件下では反応性は無い。

10.2. 化学安定性

通常の取り扱い条件下では安定である。

10.3. 危険有害反応可能性

重合反応： 危険な重合反応は起こらない。

危険反応の可能性：通常の取り扱い条件下では無い。

10.4. 避けるべき条件

直射日光・50℃以上の高温・炎・火花・穴あけ行為

10.5. 混触危険物質

酸化剤、ハロゲン化合物

10.6. 危険有害な分解生成物

一酸化炭素、一酸化硫黄、その他有機化合物

11. 有害性情報

製品の有害性情報

エアロゾル製品であり、蒸気やミストは呼吸器系に悪影響を及ぼすおそれがある。

成分の有害性情報

[ヘキサン]

急性毒性	
経口	ラットの LD50 値、15800、28700、32400 mg/kg〔以上、EHC 122 (1991)〕に基づき、区分外とした。
経皮	5mL/kg (換算値 3297mg/kg) でウサギに死亡がみられた〔PATTY (5th, 2001)〕との記述があるが、詳細な情報はなく、データ不足のため分類できないとした。
吸入	吸入（ガス）： GHS の定義における液体である。
	吸入（蒸気）： ラットの LC50 値、48000ppm/4h〔環境省リスク評価第 1 巻 (2002)〕、74000ppm/4h〔EHC 122 (1991)〕に基づき、区分外とした。なお、1 bar=750 mmHg として、蒸気圧 160 mbar (20℃)〔ホンメル(1996)〕より飽和蒸気圧濃度は 157895 ppmV、したがって気体の基準値により分類した。
	吸入（ミスト）： データなし

皮膚腐食性・刺激性	ウサギの皮膚に半閉塞適用 24 時間後に軽度の刺激性 (slight irritation) が認められた (DFGOT vol.14 (2000))。ヒトでは閉塞適用 1～5 時間後に紅斑、5 時間後に水疱形成も見られ、1.5 mL を前腕部皮膚に適用後ヒリヒリ感と灼熱感および一過性の紅斑を認めた (DFGOT vol.14 (2000))。さらに、EU 分類で Xi、R38 に分類されている (EU-Annex I (Access on July 2005)) ことを考慮に入れ区分 2 とした。
眼に対する重篤な損傷・刺激性	ウサギの試験で、本物質を 0.1mL 点眼した結果、軽度の刺激性 (Slight irritation) がみられた (DFGOT vol.14 (2000)) ことから区分 2 とした。
呼吸器感受性又は皮膚感受性	呼吸器感受性：データなし
	皮膚感受性：ボランティア 25 例を対象とした皮膚感受性試験(Maximization test)で感受性が認められなかったとする陰性結果(DFGOT vol.14 (2000) : WHO (World Health Organization) (1991) n-Hexane. IPCS - Environmental health criteria 122, WHO, Genf.)はあるが、本報告のみでは感受性がないことの確かな証拠とするには不十分であると判断し、分類できないとした。
生殖細胞変異原性	マウスの吸入ばく露による優性致死試験 (生殖細胞 in vivo 経世代変異原性試験)で陰性 (DFGOT vol.14 (2000) 、ATSDR (1999))、マウスに吸入ばく露による赤血球を用いる小核試験 (ATSDR (1999))、マウスおよびラットに吸入ばく露による骨髄細胞を用いる染色体異常試験 (体細胞 in vivo 変異原性試験) (DFGOT vol.4 (1992)) でいずれも陰性結果に基づき、区分外とした。なお、ラットの生殖細胞および骨髄細胞を用いた in vivo 染色体異常試験で陽性の報告もされているが、試験に方法的欠陥があり染色体異常誘発の証拠とは見せないと述べられている (DFGOT vol.14 (2000))。また、in vitro 変異原性試験として、Ames 試験 (EHC 122 (1993)、ATSDR (1999))、5178Y 細胞を用いたリンフォーマアッセイ (EHC 122 (1991))、CHO 細胞を用いた染色体異常試験 (DFGOT vol.4 (1992)) などで陰性の報告がある。
発がん性	ラットおよびマウスに 2 年間吸入ばく露による発がん性試験 (GLP 準拠)において、ラットでは雌雄どの部位にも腫瘍発生頻度の増加は見られなかった (DFGOT vol.14 (2000)) が、マウスの雌で肝細胞腫瘍 (主に腺腫) の発生頻度の有意な増加が認められた (DFGOT vol.14 (2000))。しかし、このデータのみでは分類に不十分であり、他の評価機関による既存分類もなく「分類できない」とした。
生殖毒性	ラットを用いた吸入ばく露による二世代生殖試験において、2 世代とも親動物 (F0 および F1) の性機能および生殖能に障害を起こさなかった (DFGOT vol.14 (2000)) が、ラットに 500～1500 ppm を妊娠期間中の吸入ばく露により吸収胚率の増加 (EHC 122 (1991))、ラットに 5000 ppm を妊娠 6～17 日に吸入ばく露により同腹生存仔数の用量依存的に有意な減少 (ATSDR (1999)) がそれぞれ母動物の体重増加抑制とともに認められたとの試験結果がある。また、EU フレーズは R62、MAC は C に区分している。以上のことから区分 2 とした。なお、一方でラットに 1000 ppm を妊娠 8～16 日の吸入ばく露が吸収胚率の増加にはつながらなかったとする報告 (EHC 122 (1991)) もある。
特定標的臓器・全身毒性 (単回ばく露)	ヒトのボランティアを用いた吸入試験でめまい、職業ばく露において傾眠が見られた報告 (EHC 122 (1991)) があり、また、ラットまたはマウスを用いた吸入ばく露試験で認められた症状として、運動失調、協調欠如、鎮静、麻酔の記載がある (EHC 122 (1991) 、PATTY (5th, 2001)) ことから区分 3 (麻酔作用) とした。一方、ヒトで吸入ばく露後、咽喉または上気道の刺激を起こした、あるいは起こし得るとの記述 (ACGIH (7th, 2001) 、PATTY (5th, 2001))、かつ、マウスに吸入ばく露により気道刺激が観察されたとの報告 (PATTY (5th, 2001)) に基づき区分 3 (気道刺激性) とした。
特定標的臓器・全身毒性 (反復ばく露)	本物質の職業ばく露により多発性神経障害、末梢性神経障害、多発性神経炎の発症を示す数多くの報告がある (環境省リスク評価第 1 巻 (2002) 、EHC 122 (1991) 、ACGIH (7th, 2001) 、

	DFGOT vol.14 (2000)、PATTY (4th, 1994)、ATSDR (1999))。また、本物質のばく露を受けたヒトを対象とした疫学研究も繰り返し実施され、その多くがばく露とこれらの有害影響との関連を認める結果となっている(環境省リスク評価第1巻(2002)、産衛学会勧告(1993)、DFGOT vol.14 (2000)、ATSDR (1999))。以上のヒトの症例報告と疫学研究の結果に基づき区分1(神経系)とした。なお、動物試験ではラットに反復吸入または経口ばく露による所見として、末梢神経障害、神経行動学的影響、脛骨神経の軸索変性、後肢脱力、神経伝達速度低下などが記録され(PATTY (5th, 2001)、EHC 122 (1991)、DFGOT vol.14 (2000))、その多くがヒトの症状と共通している。
吸引力呼吸器有害性	炭化水素であって、かつ 40°Cでの動粘性率が 20.5mm²/s 以下であることから、区分1とした。DFGOT vol.4 (1992) にはラットで Aspiration により化学性肺炎が認められたとの記述もある。

[LPG]

急性毒性							
経口	データなし						
経皮	データなし						
吸入	<table> <tr> <td>吸入(ガス):</td><td>データなし</td></tr> <tr> <td>吸入(蒸気):</td><td>GHS の定義における気体である。</td></tr> <tr> <td>吸入(粉じん):</td><td>GHS の定義における気体である。</td></tr> </table>	吸入(ガス):	データなし	吸入(蒸気):	GHS の定義における気体である。	吸入(粉じん):	GHS の定義における気体である。
吸入(ガス):	データなし						
吸入(蒸気):	GHS の定義における気体である。						
吸入(粉じん):	GHS の定義における気体である。						
皮膚腐食性・刺激性	データなし						
眼に対する重篤な損傷・刺激性	データなし						
呼吸器感作性又は皮膚感作性	呼吸器感作性: データなし 皮膚感作性: データなし						
生殖細胞変異原性	In vivo 試験のデータがなく分類できない。なお、Ames 試験(invitro 変異原性試験)の結果は全て陰性である[IUCLID(2000)]。						
発がん性	データなしなお、EU 分類では R45(May cause cancer.)でカテゴリー1 に分類されている。						
生殖毒性	データなし						
特定標的臓器・全身毒性(単回ばく露)	データなし						
特定標的臓器・全身毒性(反復ばく露)	ラットを用いた 90 日間の吸入ばく露試験(用量: 1017, 4489 ppm/6h)において、NOAEL=4489ppm とされ、ガイダンスの区分 2 を超える 4489ppm の用量で死亡ならびに毒性影響は観察されていない(IUCLID(2000))。また、21 日間の吸入ばく露試験(用量: 0.12、1.15、11.8 mg/L/6h(48, 469, 4808 ppm/6h)において、NOAEL=4808 ppm とされ、ガイダンスの区分 2 を超える 4808 ppm(90 日換算: 1122 ppm)の用量で死亡ならびに毒性影響は観察されていない(IUCLID(2000))ことから区分外(吸入)に該当するが、リスト 2 のデータであり、他の経路の結果もないことから分類できないとした。						
吸引力呼吸器有害性	データなし						

[界面活性剤]

急性毒性		
経口	本物質のデータはないが、LAS-Na 混合物（アルキル鎖の炭素数 10～14）を用いたデータ：ラットを用いた経口投与試験の LD50=1,460 mg/kg（雄）、1,470 mg/kg（雌）（CERI・NITE 有害性評価書 No.5（2005））に基づき、小さい方の値である 1,460 mg/kg から区分 4 とした。	
経皮	データなし	
吸入	吸入（ガス）:	GHS の定義による液体または固体であるため、ガスでの吸入は想定されず、分類対象外とした。
	吸入（蒸気）:	データなし
	吸入（粉じん）:	データなし
	吸入（ミスト）:	データなし
皮膚腐食性・刺激性	本物質のデータはないが、LAS 混合物（アルキル基の炭素数が 10～14）のデータとして、CERI・NITE 有害性評価書 No.5（2005）のヒト疫学事例に、原体ではないが「1%LAS 水溶液の 24 時間適用で中等度の刺激がみられた」という記述があることから、中等度の刺激性を有すると考えられ、区分 2 とした。	
眼に対する重篤な損傷・刺激性	RTECS（2006）のウサギを用いた眼刺激性試験の結果の記述に、デシルベンゼンスルホン酸ナトリウムの純度は不明であるが、450 mg を投与し、「重度（severe）の刺激を示した」との記述があることから、重度の刺激性を有すると考えられるが、データ不足のため分類できないとした。	
呼吸器感受性又は皮膚感受性	呼吸器感受性：データなし 皮膚感受性： 本物質のデータはないが、CERI ハザードデータ集 2001-20（2002）、CERI・NITE 有害性評価書 No.5（2004）の記述に、C の数は不明であるが、直鎖アルキルベンゼンスルホン酸及びその塩の場合、モルモットを用いた皮膚感受性試験結果、「皮膚感受性がある」ことから、区分 1 とした。	
生殖細胞変異原性	本物質自身の明確なデータがなく、データ不足により分類できない。 なお、NTP DB（Access on June, 2006）、CERI・NITE 有害性評価書 No.5（2005）、EHC 169（1996）に記述されている直鎖アルキルベンゼンスルホン酸（LAS）及びその塩〔アルキル基の炭素数が 10 から 14 までのもの及びその混合物に限る〕に関するデータでは、経世代変異原性試験（優性致死試験）で陰性、生殖細胞 in vivo 変異原性試験なし、体細胞 in vivo 変異原性試験（小核試験、染色体異常試験）で陰性、Ames 試験陰性とされている。	
発がん性	既存分類がなく、本物質自身の明確なデータもないため、専門家判断に従い、分類できないとした。 なお、CERI・NITE 有害性評価書 No.5（2005）には、直鎖アルキルベンゼンスルホン酸（LAS）及びその塩〔アルキル基の炭素数が 10 から 14 までのもの及びその混合物に限る〕の発がん性試験データが記述されている。	
生殖毒性	本物質自身の明確なデータがなく、データ不足により分類できない。 なお、CERI・NITE 有害性評価書 No.5（2005）、EHC 169（1996）に記述されている直鎖アルキルベンゼンスルホン酸（LAS）及びその塩〔アルキル基の炭素数が 10 から 14 までのもの及びその混合物に限る〕に関するデータによれば、経口経路では親動物および次世代に影響はみられていないが、経皮経路で、親動物に一般毒性影響のみみられる用量で、受胎率の低下や次世代に奇形がみられている。	
特定標的臓器・全身毒性（単回ばく露）	データなし	
特定標的臓器・全身毒性（反復ばく露）	データなし	
吸引性呼吸器有害性	データなし	

12. 環境影響情報

製品の有害性： 情報なし

成分の有害性

水生環境急性有害性	甲殻類(オオミジンコ)の 48 時間 LC50=9.55mg/L(EHC169,1996)[界面活性剤]および、甲殻類(オオミジンコ)の 48 時間 LC50=3.88mg/L(EHC122,1991)から、区分 2 とした。
水生環境慢性有害性	急速分解性があり、かつ生物蓄積性が低いと推定される(logKow=2.02(PHYSPROP Database 2005)ことから、区分外とした。

13. 廃棄上の注意

残余廃棄物

廃棄の前に、可能な限りの無害化、安定化及び中和等の処理を行って危険有害性のレベルを低い状態にする。

廃棄においては、関連法規制ならびに地方自治体の基準に従うこと。

汚染容器および包装

容器は洗浄してリサイクルするか、関連法規制ならびに地方自治体の基準に従って適切な処分を行う。

空容器を廃棄する場合は、内容物を完全に除去すること。

14. 輸送上の注意

国際規制

国連番号:	1950
品名:	エアゾール
国連分類:	2.1

国内規制

陸上規制情報: 高圧ガス保安法、消防法の規制に従う。

航空規制情報: 航空法の規定に従う。

海上規制情報: 船舶安全法の規定に従う。

特別の安全対策: 輸送に際しては、直射日光を避け、容器が高温とならないように注意する。
容器の破損、腐食のないように積み込み、荷崩れの防止を確実に行う。
容器に衝撃を加えたり、引きずる等の乱暴な取扱いをせず、転倒、落下、破損しないように積載する。
重量物を上積みしない。

15. 適用法令

<国内法令>

労働安全衛生法: 危険物・可燃性のガス

化学物質管理促進法(PRTR 法):	該当しない
毒物劇物取締法:	該当しない
海洋汚染防止法:	有害液体物質(Y 類同等の物質)(環境省告示)
消防法:	第四類第 1 石油類 危険等級Ⅲ
航空法:	高圧ガス・引火性高圧ガス・引火性液体
船舶安全法:	高圧ガス・引火性高圧ガス・引火性液体
港則法:	高圧ガス・引火性高圧ガス
労働基準法:	疾病化学物質(ヘキサン)

16. その他の情報

Rコード全文

R12 - 極度に可燃性

R10 - 可燃性

参考文献: Slide Products Inc. SDS

日本産業衛生学会(2012)許容濃度の勧告

GHS 分類結果データベース(独立行政法人製品評価基盤機構ホームページ)

中央労働災害防止協会安全衛生センターホームページ

厚生労働省 職場のあんぜんサイト

(www.anzeninfo.mhlw.go.jp/index.html)

【注意】本 MSDS は、JISZ7252:2009、JIS Z 7253:2012 に準拠し、記載内容は現時点で入手できる資料、情報、データにもとづいて作成しておりますが、含有量、物理化学的性質、危険・有害性等に関しては、いかなる保証をなすものではありません。また、注意事項は通常の取扱いを対象としたものなので、特殊な取扱いの場合には、用途・用法に適した安全対策を実施の上、ご利用下さい。